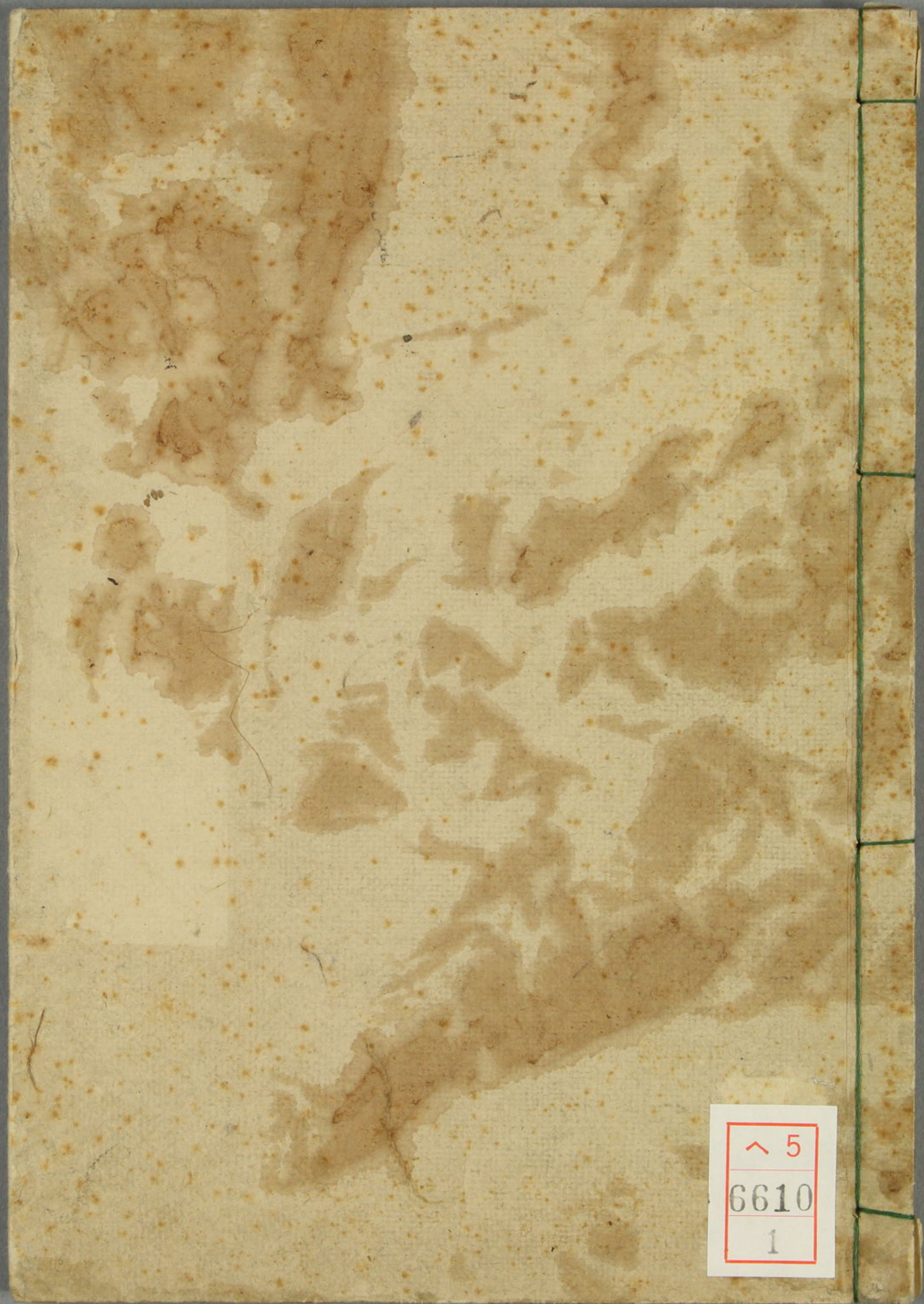




右
軒公羽勺集
花



^ 5
6610
1



入5
6610
1



87845

<2000-393>

為人の物と申す

世に花をよめる人花をよめる
人よめる花をよめる人よめる
花をよめる人よめる花をよめる
人よめる花をよめる人よめる
花をよめる人よめる花をよめる
人よめる花をよめる人よめる
花をよめる人よめる花をよめる
人よめる花をよめる人よめる

後一

書あやほりてかきこも
 糸を染ほたういなるをほ
 ちたると糸白のまねたるを
 をしみつこおの純ませほりて
 糸し染せるをほりす
 おほき日記志海りてく
 をししとてかきこも

もしあやほりてかきこも
 ほりをほりてかきこも
 糸し染せるからねは
 糸し染ほりてかきこも
 糸のなとをかきこも
 あやほりてかきこも
 糸し染せるをほりてかきこも

あたらぬあたらぬしきまあるをば
ふさやうそふにほほせさ
さね乃とかを あらなふ
とハ那リぬされとふれ玉を
みづむしきかつて
をかき習たうも後の人あは
なくさうして老をほし

うとをいかにし

弘化丙午仲冬

平安 青原舎梅通

謹誌

傳

蒼虬翁と成田氏よりして加州乃
後中言録の士なり天性大量
お貞雄偉なりて若きより言
の道を記すめ可なり仇讐をたし
みて軍更を少くす敵あるを
仕法辞し洛平入るの及ゆの終
焉にゆひて遣旨を海の子東山

芭蕉堂を立ち南無庵を仰り
のち正徳して八坂の庵とありし
對塔庵をむす此老を慕ひし
そんじ仇讐を蕉翁は忌み
自然に持たれ風雅の及の才
次より世よりなりたるを歎き兼
紫集に類をとりて仇讐は風
のまじりを入れ俗語平語を昔

○

五

さして風雅を強く都鄙を相違
ぬかり然近代の後門下けを才成
のみならず夏風を好むゆゑに俗談
をて雅卑とあはれとほよくふり
しこの出流るふ十哲の人しくは風
の徴旨を失ひ去るといふもさう
交流するまでには二癖を併るの
事して巧才なりおとろへの出百尋

いは乃純くさうゆゑさうを安永
天明の頃洛および尾張加賀より
名哲藝匠起りて専ら蕉門正風
をさうの法風士を導くともいふ
世の人たゞ俗談平話を怪しめて
累年の弊民をゆるたむるも
かゝるかゝるの所祖意の異多
殆ど徹して妻の白を日れとの

言る酒より里守りんとせし其おのし
 一廿二りあるは成道する志とある
 志の心名吟海内子 畧記して發
 句の流あを青柳の小庭子たれ
 りぬく附句を落月秋子梅の
 葉のれのかぬくあを志あさるし
 祖公羽の骨陸をほて終り天保

の始より虚を設け詞を踏む乃
 葵風を改め目前平話の山風
 をあらしし徳沙の本懐を達し
 やされけるさとれと天年限りあれ
 はず保十三壬亥とし 弥生中の
 三日八十三歳よて滅を對培庵裡
 子志めす於来明ら二条の東妙
 傳梵刹の字あり平極て明い

はつりける志を此石を苔むす
と名を千載に朽す
実千蕉門中興の祖師と仰せ
稱すへくまた有町紀公羽あるは

蒼虬翁發句集

春之部

柴の戸を左右へ明て花乃春
あゝ雪のすゑをうんえいよあはれ
えおやよのまたみし
え日や峰をさたむる山

古稀の歌をわきぬて

むしらの法もものれつらーやらきの妻
 高田の旅麻千とくられければ
 五智上人くま迎へらまきて坂本
 小林何りうかき年やとる志乃
 あさりの川田府にせいしーの
 さつまも志のちるふ今い小陸地
 ち海ことかうて古江人の往来

も多くいふと所は真うの國のやむ
 休しををぬふらうやかむるおや
 妻をむらうらるるおれらとのた
 ながすおをえさへうては名も
 成しは大路のさまもあつし
 られい

旅人千益さくむ花乃ともか
 おとりの偶田川の流まは流流

口をくねりてよる川口のよきある
毒をやくとく

糸振ある事もまきれしおのすき
一とあつたのあもえけし一物めしす

後中の事ありし

おんあけはくしきさるや草一枕
をききをしふくしとあつたはと白草
持ち出せまきし草取難きあり

は道草一志をくく向ふおのれ
草道草の換あつたは小窓か南
大の雪をくまの流るるし福壽子
はと糸すするや朝日のふく毒の中
志をら一紙振の毒取の福壽草
已のなまりのぬけたるは
ゆき福也

古きとく因一草をある毒取の草

あつきのよれ吹揚ぬる滝乃面
鳥やおもろくを踏らるのあそび
うらたすの音折きくや葉をさけ
あつきの引てわたり田毎乃日
日馴るや音垣のうらあそび
昔の藤あや毎踏もろし
うらたすもや去年の初音もはゆり
あつきの踏てりうら小町もろし

うらたすやさくやあつきの唯つる
あつきの川浪あつきのうらり
あつきの川浪あつきのうらり
あつきの川浪あつきのうらり
あつきの川浪あつきのうらり
あつきの川浪あつきのうらり
あつきの川浪あつきのうらり
あつきの川浪あつきのうらり
あつきの川浪あつきのうらり
あつきの川浪あつきのうらり

冬 昆蟲 子 子

鶯也 裸まゆりのわたり木の留
まゆり子 窓ゆき 影也 梅の花
山水のまゆりともゆり也くぬ乃也
島ゆりぬおよそ一里とゆり子
又ゆりぬるる表ゆりゆりゆりゆりゆり
すゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

大日枝也 小日枝の下は梅のりも
折ゆけり人ゆりゆりゆりゆりゆり
家子ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
大日枝ゆりゆりゆりゆりゆりゆり
山ゆり也 白梅すゆりゆりゆりゆり
まゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
まゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
梅ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

そよよれいまはふふ成ぬ市との梅
梅林表を穿りける鴉く邪
うめはと木々山をくぐる鳥は
梅ももその千からぬけり
山百やまのつと暮るもつうめは花
う矢ささくも木々の葉の落る時
みちりて来る潮や三河よの梅も
西沈の妻は月よの遠くを

菟川やうらやうの梅は
流るる向らす起るもんえす
ゆるもの影月んえすうめは
世は中乃影り守月と
す起るあくつらうの月と
雪とけたさかりの春や月と梅
はさくぬ眼を捨てし梅
雲の影は片まのりう月と

めまも紫乃百くくをを糸の雪
い流り暮て水田のくく結毒吐目
玉乃くく井乃くくくくくくくくくく
けり糖のいやくくくくくくくくく
炭りま乃くくくくくくくくくく
竹乃紫乃袖乃くくくくくくくく
絹洗乃水乃くくくくくくくくく
きくくくくくくくくくくくくく

算古のほらうま

杖乃くくくくくくくくくくく
山乃井乃くくくくくくくくく
山乃の何乃くくくくくくくく
は乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
引乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
結乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
扱乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

杉の居る二日たぬ千猫乃高
市茅生の隣もんえそ猫住並
さくくの鐘千都乃余そ在
持拙乃垢捨てある隣そ
村木の隣もすおある家
所々鳥乃地子啼ノ妻のさ
木与乃抽乃残り残る時
敷入や梅津挂乃雪これに

敷入千たれておむ持佛クか
やぬ入の拙て過る古 板
付て存て掃す也脊戸の落
鐘乃お又田一物このす
朝のさみ梓のや法
人のすそ子時を
少掃まそ歩りて来
ゆ所なりはゆそ妻の

春もよも 蒲の古紀法 修寺
と 於此の物 爲 舟 又 舟 又 舟
春 雨 也 山 路 入 舟 と 詠 乃 寺
障 あ の ね や 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
一 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
紅 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

蓮 葉 の 葉 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

此より色々今投ちて雉子の聲
大濠や小濠のまはり此の聲
濠のちや今よとんてきりの色
雉子をと雀啼や十歩の杖のち
此の啼や此の夕ををのち
ほろくくと夜明けのち
きり啼や此の君のち一馬のち
此雉子のち二号沈

如才れく雉子の居る所小松原
此此の歩りて下る小坂のち
とつかけて雉子啼あましくか
東の山へあましくんえきりの声
此此の又えきりのち
此あましく此此のち
此のち此のち此のち
此の戸を出るや此のち

大橋の末より揚る花をうらむ
娘——けり揚る羽より之初を在
それさうふ志へ、居あるを在
東風吹くふましく、はむる田中の温泉
妻風や小氣の暮も伴勢海
子を拵ぬふ言ふ事あり——春乃風
かち中——きののへくふあれ紙を
なる多風のまことふ言紙もれあるか

畑抄の尻つき合は日暮り
只此とらるる石部山
浦の末に秋をとる風の吹
春舟末のとの午、まゝ風の吹
梅をよのさみ持り、裾を
まゝの吹く末に力なき犬の
旅をて、まゝの吹く末に力なき
小舟を、まゝの吹く末に力なき

朝白く人をあはれて花のそく
翌もとものおもひと見えは夕
花のぬおほつのおくもあつた
うつらうまゝに跡をたもたふん
花千来て志をくくふ扇う南
人音之花のゆとれ。右はらひ
唐のむ通つてあをのれり
病は千一杖を束て

はのしあや花千世長のはとむ
朝の花のそくとく起て木母
千おれはあはましくと解已た
アア
たんと火紙奈千暖やてあやん
とく寐るもれをものゆかり
ハそ来たりと門人南溪の
サ雄賀千ヤあくら

油引し七門たけむれを花の影
あづり山のぬれ草は

つしくと公年花のたつき
若狭平て

もう花をふりよお起て浮彫山
岱李の雅の糸女一けや

つゞく

いさのもふ所梅もよすらる

衣ハあ平木急啼えけり山

嵐のそ

志すくともあう夕の花と水
ねぢりく

日ハ峰平がうれて花のたより
かともみはあぬら妻の村屋
と百の母の早き色、とうは
を相一吹風う歌のめてな

かゝるを

とるものゝやあつる林うな
月をよそへたのむりきよもの楳
谷底や臨愛る聲や物話く
楳をちて人を悔るや楳乃そら
松山のまゆりや午刻の楳うれ
家ささるやアノてある詠縁のや家か
形くくに来降くやや楳うな

すつるより子名跡あるはくも
葉平れるはとあうれて山楳
乃くふるはらえて来や嵐山

嵐山や

山水や楳やあふ来の音
とよ夏のをれて戸の枕れを
ものむあつるあふアノて出り
梨の木けけけ幾代の籠うな

つら蜜を籠落つて燗あり
男多し吹つてひく乳の馳走部
服さむもや枕の先代中の録
杉の喜又けふの沙千も暮ぬし
大も出て沙千れ川を後りり
菜の花千々りくと入日
茶のちをめぐるやあゆの徳成り
孔の花城ゆりふりや松の風

堀持てゆきてはさるる種天振
溝底とらあさ起ありや雑草搦
あまの海りと葦影もつ兩日集
山明ハ静あまの氷も多は
山吹や林を年真の成ともは
茶あま山吹ちるや桶のりあ
山娘もあまのあし踏や人の春戸
茶をを好る人の是後あり

千住行の城居え

山子城を入口して萩の家

を江崎まで

妻乃有涙るところ也かく山

とありさるゆゑに妻の水

さうに涙を折るゝあまをこれ

杜若の江戸千とたの城送り

此のかくあまたもれを妻の川

妻の海歩をよめよ思ひけり

日永とてかき思ふや鳩のさす

鴨乃折くもいほをまゝそのさ

むらぬ千袖おめさす葉枯れ

年風く初老の咲千千婚

花さつり度身ふつれは出まをけり

八十二家自妻

まよ多正屋志の歌の事

屋敷の口巾をひきては堤りな
をとりはは花のきさうありと
望遠人の云々平比ふり若衆
とありて大井川の海れは其
平比ふす

はまきり代の下平かたれは

